



「オムライス」のこと

だから、今、読み返して、驚いている。こんなにも願望の詰まった掌編だったか。子供たちに強く育ててほしい、希望を見つけてほしい、精いっぱい親の愛情にいつか気づいてほしい。そして、願わくば、おいしいオムライスを。——これは、私自身が誰かに読み聞かせてもらいたい物語だったのだ。

あるとき不意に記憶が鮮明によみがえることがある。まるで、もう一度体験しなおすみたいに反芻し、そうして初めてその出来事の意味がわかるようなこと。
たとえば、高校時代の友達のなにげない笑顔をいつまでも覚えている。思い出すたびに、笑顔の素敵な人だったと懐かしんでいたのだけど、あるときハッと気がついた。記憶の中の彼女はいつも正面を向いている。彼女は常に私に向かって笑いかけてくれたのだ。その笑顔に応えることはできたのだろうか。心残りはある。それでも、彼女が私を大事に思ってくれたことを、遅ればせながら知ることができてよかったと思う。
誰かのメッセージに気づくことができるのは、奇蹟みたいなものだ。たとえ時間が経ってしまったとしても、受け取ることができれば、胸の中で花が開くような心持ちになる。
「オムライス」では、その「誰か」の役を一冊の本が担ってくれた。本が教えてくれることは、文字にして書かれていることだけではない、と思う。
もともとの依頼は、「母の友」という雑誌だった。幼い子供たちに読み聞かせる短い物語の特集号に、普段は読み聞かせる側のお母さんが、誰かに読み聞かせてもらうための物語を、と頼まれたのだ。当時、私の子供たちは八歳、六歳、四歳。毎日てんやわんやで、物語を書く時間を確保するのも必死だった。



宮下奈都

〔みやしたなつ〕 普通の人々の日常を取り上げ、そこで揺れ動く人物の心情をみずみずしい筆致で描く。作品に「よろこびの歌」「誰かが足りない」「羊と鋼の森」などがある。

三崎亜記

〔みさきあき〕 現実と非現実を織り交ぜた虚構性の強い物語を通して、漂流する現代の不安を描き出す。作品に「となり町戦争」「失われた町」「海に沈んだ町」などがある。



Photo by 前康輔

曲がりなりにも作家なのだから、国語の教科書や授業に関する思い出の一つや二つはあるだろうと記憶を探ってみたが、何一つ、本当に何一つ思い浮かばない。
だからといって、「国語の授業なんて必要なかったんだ」なんて暴言を吐くつもりはない。子どものころ、自分が毎日どんな食事をしていたかなんて、いちいち覚えてもないが、その記憶にない蓄積が、今の私の身体を作ってくれたんだ。国語の授業だって、それと同じようなものだろう。
今回、採用された私の作品、「ゴール」は、何のためのゴールなのかもわからず、ゴールがどこにあるのかもわからないまま、ひたすらゴールも目指して歩き続けなければならない男の話だ。終身雇用制度というものが崩壊しつつある今、新卒で入社した企業でも、定年退職という「ゴール」が、必ずしも用意されているわけではない。「何千人をリストラ対象として……」などという報道を聞くたびに、ゴールを勝手に移動されてしまった人々の怒りや憤りを思ってしまう。
だがこのストーリーは、誰かに設定されたゴールをただ漫然と、目的もなくたどり続けることへの批判でもある。ゴールは誰かに用意してもらおうものではなく、自分自身で決めるものだろう。何がゴールなのかわからないまま歩き続けるような、混迷の社会状況が続いている。若い世代には、先の見えない焦燥や不安に押しつぶされることなく、一歩ずつ、それぞれのゴールに向かって歩いていってほしいものだ。そんな彼らが未来の一步を踏み出す際の、「記憶には残っていないけれど、必要だった蓄積」に、この作品がなってくれたなら幸いだ。

記憶にない蓄積

